

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「家族の得意技」という夏休みの課題作文を出された小学生のケンは、高校時代に砲丸投げの選手だった母親についてはすぐに書けたが、父親の得意技は見つけられず、困り果てている。母親の千春は見かねて父親の私に相談をもちかけてきた。

「つづき、読んでみて」

と言われても、読むほどの分量も内容もなかった。

ママの得意技を書いたあとは、改行してへパパのほうは、とつづいて――終わり。

「昨日のうちに、ここまで書いたの」

「うん……」

「で、今日は朝から考えてたの」

「らしいな……」

「ずっと、ずっと、考えてたんだって」

そんな似合わないことをするから、知恵熱を出して寝込んでしまったのだ。

「昔のアルバムとかビデオとかも見て、いろいろ思い出してみただけど……」

つづく言葉を言い淀んだ千春に代わって、自分で言った。それくらいAの優しさはあるつもりだし、プライドだった。

「なにも浮かばなかった、と」

千春は「そうなの……」と申し訳なさそうにうなずいた。

最初は、ゲンもすぐに書けるとタカをくくっていたらしい。だから、夏休みに入って真っ先に手をつけて……挫折した。

「やっぱり最後に回すって。まだ一ヶ月以上あるから」

「じゃあアレか、その間に俺の得意技をなんとか見つけなきゃ。つてことか」

「……ごめんね」

得意技――。

「ね、これ、どう？」

「なにかいいのあったのか？」と思わず声がはずんでしまう自分が、ちよつと情けない。

「うん……これ、いいかも……そう、確かに得意技だし……」

千春は虚空を見つめ、つぶやいた自分の言葉に自分で何度もうなずいた。

遠くのほうを見つめているような横顔だった。それも、うんと、うんと、遠くを。

「高校の頃の得意技でいいじゃない」

千春は虚空を見つめたまま言った。

私は「はあ？」と問の抜けた声で聞き返した。

私たちは高校時代の同級生だった。言葉にすると恥ずかしいが、お互いに、初恋を交わらせて結婚した。だから当然、千春は高校時代の私のこともよく知っている。あの頃の私が、勉強がそこそこできる以外にはたいして目立つところのない少年だったことも、よく知っているはずなのだ。

「得意技なんてなかっただろ」

「いえ、ありました」

きっぱりと言われた。

私たちは陸上部の仲間だった。

ウォーミングアップのランニングのときには、掛け声とともに走っていた。

ただし、私が練習に参加するのは、そこまでだった。

ランニングが終わると、部員は競技別に三つに分かれる。

「走る」トラック組と、「跳ぶ」投げる」フィールド組と、そして「手伝う」マネージャー組——私たちは同じ陸上部員ではあったが、「組」は違っていた。

水谷千春サンは、右腕をぐるぐる回しながら、グラウンドの隅に向かう。

森本和志くんは、首からいくつも提げたストップウォッチの動きをチェックし、百メートル測れる巻尺を足元に置いて、バインダーに挟んだ練習計画表に、まず、今日の日付を書き入れる。

千春は女子陸上部でただ一人の砲丸投げの選手で、私は陸上部で一人きりのマネージャー——高校時代の私たちはそういう関係だったのだ。

だから、千春が見つけた私の得意技というのは、おそらく陸上部がらみで、マネージャーとしての……。

察しの悪い私を見かぎって、千春は答えを教えてください。

「ライン引き」

「は？」

「森本クンの引いたライン、最高だった。石灰の白いのが、こう、サーッと延びてるわけ、カーブのところもきれ

いなアールになってるわけ。わたし、あなたのライン引き、ほんとうにうまかったと思う。これはもう才能だよ、絶対に」

「みんなに笑われちゃうぞ、ゲンが」

「そうかなあ」

「あたりまえだろ、なんだよ、お父さんの得意技は陸上競技のライン引きです、なんて」

だが、千春は「そうかなあ……私はいいと思うけどなあ」と残念そうに言って、「トラックの子も、みんな言ってるんだよ。森本クンのラインって走りやすいね、って」

「ラインなんて誰が引いても同じだって。長さが違うわけじゃないんだし」

「それはそうだけど、でも、違うの。森本クンのラインは最高だったの」

千春はきっぱりと、しみじみと、言った。

ある日、千春は、妹のように応援していた砲丸投げの選手森千夏が若くして亡くなった新聞記事を目にする。オリンピックでのメダルを期待されながらも夢を果たせず亡くなった千夏の悔しさを思い、生きている自分が何かしなければと決意して砲丸投げの

練習を再開する。ゲンも母親の練習に参加するうち、母親を尊敬し始める。一方、父親である私の得意技は見つからぬまま、ゲンの夏休みも後半となり、家族で帰省するついでに両親の母校を訪問することになる。

母校のグラウンドに足を踏み入れるのは、いったい何年ぶりだろう。十年ではきかないはずだ。

懐かしい——という思いは、不思議と湧いてこない。まだ「懐かしさ」という形にまとまっていない高校時代の記憶の断片が、むしろ悲しいような、せつないような……。

千春も同じように感じているのだろうか、レンタカーの中では「パパとママが出会った場所なんだよ、運命の場所なんだよ」と陽気にゲンに話しかけていたのに、グラウンドに立つと急に黙り込んでしまった。

お盆ということもあって、グラウンドで練習しているのは野球部だけだった。

バックネットにラインカーが立てかけてあった。それを借りるしかないだろう。

なんだかなあ、息子の前でラインを引くつてのもなあ……と、納得のいかないまま歩き出したら、千春に呼び止

められた。

「あなたはゲンちゃん連れて、先に砲丸投げのところ行つてよ。ラインカーはわたし借りてくるから」

千春は立ち止まった私を追い越すとき、ゲンに聞こえないよう、小声で言った。

「ゲンちゃんに話してやればいいじゃない、あなたがマネージャーになったときのこと」

「……え？」

①「あなたのほんとうの得意技って、そこだと思っわよ」

千春はそれだけ言うと、急に足を速めて遠ざかっていった。歩きながら右腕をぐるぐる回すのは、高校時代の練習前と変わらない。

その後ろ姿を見送っていたら、悲しさやせつなさが、いつぺんに胸に迫ってきた。

それは、高校時代の私の胸の奥にあったものと同じだった。

グラウンドの隅に設けられた砲丸投げのサークルに向かつて歩きながら、昔の話をした。話しかける相手はゲンであつたが、私の話をじっと聞いているのは、むしろ私自身だった。

「ゲンならどうする？ サッカーや野球ができなくなつても、チームに残つて、いろんなことやつて、みんなをバックアップするか？」

「いろんなことって？」

「記録をとつてやつたり、練習のメニューを一緒に考えたり、あと、部室の掃除とか、タオルの洗濯とか」

「そんなこともするの？」

「そりゃそうだよ。マネージャーの仕事なんて基本的には雑用ばかりなんだから」

「えーっ、じゃあ、やだなあ」

「やめちゃうか」

「うん。やめて、別のことする」

「それも——ありだ、と思う。」

マネージャーを選ぶほうが正しいんだとは決してゲンに言うつもりはないし、私自身思つてもいない。運動部はもう無理でも、吹奏楽部あたりに入り直す手はあつたし、いつそ勉強に打ち込んでいれば、もっとレベルの高い大学に合格できたような気がする。

だが、私はマネージャーとして陸上部に残った。

「なんで？」

最初からマネージャー志望だったわけではない。入部したときには「トラック組」——中距離のランナーだった。走ることは好きだったし、中学時代にはそこそこの記録も出ていた。

だが、一年生の夏に膝を痛めた。秋の終わり頃まで、だましだまし練習をつづけていたが、不自然なフォームのせいで今度は腰を故障した。椎間板ヘルニアと診断された。無理すると松葉杖なしでは歩けなくなるぞ、とも医者に言われた。

競技者生命は、そこで絶たれた。

顧問の先生から、マネージャーをやらないかと誘われた。走ることはもう無理でも、みんなを陰で支えることだつて陸上競技のうちだぞ、と説得された。

理屈にもなっていない理屈だったよな。いまでも思うし、あの頃の私も同じように思つた。

「もうやめちゃうつもりだったんだ。自分が走れないんだつたら意味ないしな」

ゲンも「だよな」とうなずいた。いつものように混ぜ返してこないのは、これが大事な話なんだと子どもなりに察しているからだろう。

「どうしようか迷つてるときに、同じ陸上部の女の子と知り合つたんだよ」

陸上部をやめるかどうか決めかねたまま、練習を見学していたら——グラウンドの隅で黙々と砲丸を投げている女子部員に気づいた。一人でフォームを確かめ、一人で砲丸を投げて、一人で拾いに行つて、一人で巻き尺をあてて距離を測っていた。

「それがママだったんだ」

「友だちいなかったの？」

「じゃなくて、砲丸投げの選手が他にいなかったんだ。だから、練習はいつも一人だったんだよ」

「寂しい……よくやつてたね、ママも」

「好きだったんだ、砲丸投げが。重たい鉄の砲丸を遠くに投げるっていうのが、大好きだったんだよ」

「体、その頃からゴツかった？」

「うん、けっこう」

だから——なんというか、異性としてはノーマークの存在だった。そのおかげで、へんなプレッシャーを感じずに、「練習、手伝ってやろうか？」と声をかけることができた。

「なにを手伝ったの？」

② ゲンの間に答える前に、思い出し笑いが浮かんだ。そうかそうか、そういうことだったのか、と千春がライン引きにこだわった理由がやっとわかった。

「パパ、最初は投げた砲丸を拾うとか、距離を測るとか、そういう手伝いをするつもりだったんだけど、ママはいきなり言ったんだよ」

すみません、じゃあ、ライン引いてもらえますか——？
言われて、気づいた。

千春が自分で引いたラインは、扇形の輪郭も、中央線も、ミミズがのたくったように曲がっていた。

「ママって力持ちだけど、けつこう不器用だろ。あれ、昔からそうだったんだよ」

あの日私が引いたラインは、どう考えても、きれいな直線だったとは思えない。それでも千春は「すごいー！なんでこんなにまっすぐ引けるんですか？」と感激してくれた。誰かの手伝いをして、誰かの役に立って、誰かに喜んでもらえることのうれしさを初めて知った。

「それで決めたんだよ、マネージャーやってみよう、って」
選手としての未練がまったくなくなったわけではない。

なったのですが、そのおかげでママと仲良くなって、結婚できたからです。「もしもケガをしなかったら、ママと結婚できなくて不幸な人生だった」とパパは言っていました。ぼくも、パパとママの得意わざを受けついで、たくましくして運がいいひとになりたいです。終わり

F 作文を読んで私はがつくりと落ち込んでしまったが、千春は「よく書けてるじゃない、人生の本質をつかんでるわよ」と満足だった。

季節は秋になり、冬になった。

千春はいまも砲丸投げをつづけている。週末の夕食後は、家族で河原の広場に出かける。千春の投げた砲丸を拾うのが、私とゲンの仕事だ。

広場にはサークルラインもないが、千春には、くつきりと見えるのだという。夏休みのあの日、私が引いたラインのことだ。

母校のたたずまいは昔どおりでも、卒業して二十年近くたっていれば、すべてが同じわけではない。砲丸投げのフィールドにも、いちいちラインを引かなくてもいいように、テープが地面に埋め込まれていた。千春は「なにそれ、甘やかしてるなあ。わたしち損しちゃうってんだな

トラックを走る部員を見つめるのはやっぱり寂しかったし、自己ベストを更新して快哉を叫ぶ部員がやっぱりうらやましかった。自然と、いままで畑違いだった「フィールド組」の練習を手伝うことが増え、一人きりで練習する千春と組むことも増えて……いまに至る。

「だから、パパが膝や腰を故障しなかったら、ママと結婚してなかったかもしれないし、ゲンだって生まれてなかったかもしれないんだ。そう考えると、人生ってわからないよな。なにがどうなるのか」

砲丸投げのサークルに着いた。

結局、いままでの話に得意技が含まれていたのかどうか、含まれていたとしてもゲンに伝わったのかどうか、よくわからない。

E ただ、話すべきことは話したよな、と思う。ゲンのためではなく、私自身のために、ちゃんと話せた……よな？

東京に帰ってから、ゲンは作文の最後の九行を書いた。

こんな内容だった。

へさて、パパのほうは、運がいいことが得意わざです。高校時代、足をケガして陸上部の選手からマネージャーに

あ」と不満そうだったが、もしあの頃にテープがあつたら、わたしたちは結婚していいかもしれないのだから——やっぱり、ゲンが作文に書いたように、運のよさが私の得意技、なのだろうか……。

「せっかく借りてきたのに意味ないじゃない」と口をとがらせる千春を、まあまあ、となだめて、ラインカーを受け取った。

「まあ、ちよつと見てろよ」

「どうするの？」

「高校生活は三年間だけど、オトナの人生は、これからもずーっとつづくんだから」

ラインを引いていった。

最初はテープの上をなぞって、テープが終わってから、まっすぐにラインカーを押しつづけた。足元を見てはいけない。まっすぐに前を見て、遠くを見て、同じ速さ、同じ歩幅、ラインカーのハンドルを持つ右手の力も変えずに……。

G 扇形の右側のラインを引き、左側のラインを引くと、最後に中央線——まっすぐに、野球部の外野手に「なにやってるんスカ！落書きやめてください！」と怒られるまで

延ばした。

振り向くと、われながらみごとな直線が三本、グラウンドに描き出されていた。

「よし、投げていいぞお！」

声をかけると、千春はオブライエン投法で砲丸を放った。距離はたいしたことはなかったが、まっすぐに放物線を描いた砲丸は、中央線の上に着地して、消石灰の白い粉が舞い上がった。

砲丸を放ったあともフォロースルーで右手を虚空に突き出していた千春は、砲丸の着地を確かめると、その右手を

グツと引き寄せて、「ふんっ」と足を踏ん張り、「わが家新記録——っ！」と高らかに宣言したのだった。

（重松清『砲丸ママ』による。なお一部本文を省略しています。）

【注】

*混ぜり返す——ちゃかしたりして人の話を混乱させること。

*快哉を叫ぶ——愉快で歓声を上げること。

*ご満悦——心が満ち足りて喜ぶこと。

問一——線部A「それくらいの優しさはあるつもりだし、プライドだって」の「優しさ」と「プライド」とはどのようなものか、それぞれ答えなさい。

問二——線部B「タカをくくって」の意味として次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 苦勞して、大きな獲物を捕らえること。
- イ いろいろ工夫をして、完成させること。
- ウ たいしたことはない、軽く見ること。
- エ 要領よくものごとを解決してゆくこと。

問三——線部C「それも——」ありだ、と思うとあるが、「——」にはゲンの答えを聞いた私の心の動きがある。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 子供に違った意見を言われて、動揺してしまっている。
- イ ゲンの反応を見て、当時の自分のことを振り返っている。
- ウ 人のために苦勞することを嫌う息子に対して、驚き呆れている。
- エ 自分の選択を否定されて、一瞬腹が立ったが気持ちをしずめている。

問四——線部D「人生ってわからないよな。なにがどうなるのか」の私のことを、ゲンはどのように理解したのか、次の空欄に合うように文中の言葉を使って答えなさい。Ⅰ・Ⅱは十字程度で答えること。

パパは（Ⅰ）という不幸に見舞われたが、そのおかげで（Ⅱ）という幸福を得たので、（Ⅲ）が良い人生だと思っっている。

問五——線部E「ただ、話すべきことは話したよな、と思う。ゲンのためにはなく、私自身のために、ちゃんと話せた……よな？」とあるが、ゲンに話すことがなぜ自分のために話すことになるのか説明しなさい。

問六——線部F「作文を読んで私はがつくりと落ち込んでしまった」とあるが、私は、ゲンの理解に落ち込んでいるが、私がゲンに理解してほしかったことを考えて理由を説明しなさい。

問七 — 線部G「扇形の右側のラインを引き、左側のラインを引くと、最後に中央線——まっすぐに、野球部の外野手に『な
にやってるんスカ！ 落書きやめてください！』と怒られるまで延ばした」とあるが、三本のラインの意味を考えて、なぜ
中央線を長く引いたのかその理由として次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 両サイドのラインは過去と現在の私たち家族を表していて、これからの家族の幸福な未来を真っ直ぐな中央のライン
に願っているから。
- イ 両サイドのラインは出会ってからの私と千春の人生を表し、まっすぐに延びた中央のラインはどこまでも続いてほし
いゲンの未来を表そうとしているから。
- ウ 両サイドのラインは終わりが見えている希望のない私と千春の人生を表していて、中央のラインは先の見えないゲン
の人生の不安がなくなること願っているから。
- エ 両サイドのラインは失敗や苦勞を重ねてきた私と千春の人生を、中央のラインは二人の子どもであるゲンの人生を表
し、三人がそれぞれの道を歩み出したことを表そうとしているから。

問八 — 線部①「あなたのほんとうの得意技って、そこだと思わよ」・②「ゲンの間に答える前に、思い出し笑いが浮かん
だ。そうかそうか、そういうことだったのか、と千春がライン引きにこだわった理由がやっとわかった」から、千春が私
の得意技をライン引きだと主張する理由を百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

13歳で人生の目標なんか定まらない

現実の社会を見れば、多くの人々が、職業とは別のところ
ろに生きがいを見出している。

仕事なんか、なんであれ食って行ければ十分で、とにかく
好きな女の子と一緒に暮らせればそれだけで万々歳じゃ
ないかと思っている人間はたくさんいるし、そういう人間
がなさけない人間だというわけでもない。

いや、早い段階から目標が定まっている子は、それはそ
れでかまわない。

いつの時代でも、そういう子供はいたものだし、そうい
う子供はほかの生き方を選べないことになっている。その
種の、ほとんど運命を信じるみたいにしてひとつの明らか
な道を目指すタイプの少年は、ハタから見れば苦しい人生
を歩む可能性が高い。でも、本人にとっては、自分の目指
した道で経験する苦難は、その道を諦めることで得られ
る平安よりずっと居心地が良いのであろう。だから彼は、
選んだ生き方をするほかにどうしようもない。この子たち
は特別だ。

彼は見事に夢をかなえるかもしれないし、一生涯を夢
の手前の坂道でクラすことになるのかもしれない。が、ど
んな結末を迎えるにせよ、本人の選んだ道だ。他人がどう
こう言うべきことではない。

ただ、彼のような生き方だけが本当の生き方で、目標の
定まっていない少年や、気持ちの変わりやすい少女や、周
囲に流されがちな子供や、親の言いなりになっている青年
たちの生き方が愚劣で間違っている②フモウで不幸せだとい
うことではない。

職業に向かう姿勢は人それぞれだ。同じ人間の中でも時
期によって変わる。仕事一辺倒の人間として30代を働き通
しに働いた男が、ある日、突然やる気を失うこともあれ
ば、いやいや勤めていた勤務先の仕事に、入社10年を過ぎ
てからようやく気持ちが乗ってくるタイプの会社員もい
る。

そういう意味で、13歳の段階の少年少女が、自分の将来
を職業という分類だけでイメージすることは、危険だ。
自分が何かに向いていると思ひ込んでいるその何かが、
本当に自分に向いているのかどうかは、実際には誰にもわ
からない。

1、職業の入り口に立つ以前の段階で、自分の向き不向きを決めてしまいうこと自体が無謀だと考える方がマトモだろう。

職業は社会の必要を満たすためにある

13歳の段階の少女少女が、自分の得意不得意や、好奇心や、好き嫌いや、あるいは友達のマネやアニメの影響で、どんな職業に憧れるにせよ、その憧れは、どうせたいして現実的なお話ではない。

3年後には、たぶん笑い話になっている。

そういう、3年たってから振り返って笑えるみたいな憧れを持つのは大変に結構なことだ。

というのも、憧れは、それに到達することによってではなくて、届かないことや、じきに笑い話になることによって、それを抱いていた人間を成長させるものだからだ。

ただ、

「この広い世界には、きっと自分に向いた仕事があるはずだ」

という思い込みを抱くことは、夢を持つこととは違う。それは人生の選択を狭めかねない。その意味で、あまりおす

すめできない。

そもそも職業は、その職に就きたい誰かのために考案されたものでもなければ、その職に向いたシッスを備えた若者にふさわしい職場を与えるべく用意されたものでもない。

職業は、ごくシンプルに、人間社会の役割分担の結果として、社会の必要を満たすためにそこにあるものだ。

ゴミを拾うのが大好きな人間がいるからゴミが生まれているのではない。ゴミ愛好家のために廃品回収業という職業が考案されたわけでもない。

人間が生活すればゴミが生まれる。そして、ゴミを処理する人間がいないと社会が成り立たないから、ゴミ処理が職業として要請される。そういう順序だ。

ついでに職業に就く人間に関して遠慮のないところを申し上げれば、

「たいいていの仕事に向いている人間もいれば、ほとんどの仕事に向かない人間もいる」というのが本当だ。

全世界の人間に、ひとつずつ、その人にだけ向いた仕事を用意されているわけではない。

そんなのはまやかした。

学校の勉強の様子を見てみれば、中学生でも十分に理解できることだ。全科目で優秀な成績を残すスーパーマンみたいな生徒もいれば、あらゆる科目のすべての単元に関して漏れ無く出来の悪い生徒もいる。これが現実だ。

2、あらゆる子供に得意科目があつて、すべての人間に優れた能力が授けられていると考えるのは端的に言って間違いだ。

いずれ向こうからやってくる

私は、

「あきらめろ」

と言っているのではない。

反対だ。私は、人間は色々だということを言っている。

B「ということを上上げようとしている。」

C職業信仰は、ある意味で、偏差値信仰や学歴信仰よりタチが悪い。

というのも、学歴や偏差値が、しよせんは数値化された一面的な能力のシヒヨウであるのに比べて、「職業」が物語る「能力」は、ずっと多岐にわたるからだ。

だから、職業を背景とした肩書信仰は、特定の職業に就

いている者(あるいは職業に就いていない人間)への差別を生じさせる。

それ以上に、職業信仰は、「どこかに青い鳥(自分に向いた楽しくてやりがいのある仕事)がいる」という、空虚な不遇感の温床になる。その意味で実に厄介だ。

実際には、作業そのものに好奇心を抱かせる要素が無くても、いきいきと働いている人はたくさんいる。

3、ネジのアタマが均等に揃っているのかを検査するみたいなおよそ退屈にしか見えない仕事にでも、取り組んでいる人間は、それなりにいる。

よく似たなりゆきを、部活の練習で経験した生徒もいるはずだ。

作業や練習メニュー自体が退屈でも、毎日の繰り返しの中でセイカがあがれば、それなりに楽しくなってくることはある。

また、キツイサーキットトレーニングでも、気に入った仲間と一緒にこなしていれば、多少は楽しく取り組むことができる。

つまり、「職業」そのものとは別に「職場」の善し悪しや向

き不向きが、仕事の評価を変えることもあるということだ。

自分の気に入った職場で、^D気のおけない仲間と一緒に働くのであれば、与えられた役割をこなすというそれだけのことが、^Eをもたらしことになる。それ以上に、他人の目には^{*さま}瑣末な検品作業に見えるであろう仕事であっても、長年それに取り組んでいる人間からすれば、^{*}いわく言いがたい微妙な難しさがあるわけで、一定の経験を積みめば、その難しさ(他人から見れば単に「キツさ」にしか見えない何か)にチャレンジすることに^ほ誇りを感じるようになる。

つまり、多くのベテランが言うように、仕事の素晴らしさやくだらなさは、ある程度の期間それに^{たす}携わってみないとわからないということだ。

であれば、職業の名前で他人の能力を判断したり、自分に与えられている肩書きで自分の幸福度やプライドを計測することは、テストの点数で他人を^ね値踏みすること以上に空しいということがわかるはずだ。

13歳の君たちは、とてもアタマが良い。
それだけに、アタマだけで何かを判断することには^{しん}慎

^{ちよう}重にならなければいけない。

仕事は、いずれ向こうからやってくる。

それまでの間は、^Fなるべくバカな夢を見ておくことをおすすめする。

(小田嶋隆「13歳のハードワーク」による)

【注】

*多岐にわたる——多方面におよぶ。

*不遇感——正當に評価されないことに対して不満を感じること。

*温床——悪い結果につながる原因となる土台。

*サーキットトレーニング——筋力トレーニング。

*瑣末——さして重要でないこと。取るに足りないこと。

*いわく言いがたい——言葉では簡単に言い表せない。

問一

1

3

にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし

イ だから

ウ たとえば

エ ところが

オ むしろ

問二

——線部A「それは人生の選択を狭めかねない」とありますが、「それ」が指す内容は、直前の「思い込みを抱くこと」と「夢を持つこと」のどちらを指していますか。「思い込みを抱くこと」ならア、「夢を持つこと」ならイの記号で答えなさい。

また、「それ」がなぜ「人生の選択を狭めかねない」ことになるかと筆者は考えるのか、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の憧れる職業が社会から必要とされている職業と一致すると思ひ込むのはよくないから。
- イ 自分に向いた職業が必ずあるわけではないのにきつとあるはずと思うのは間違っているから。
- ウ 夢を追いかけるあまり現実を直視できなくなってしまうと、結局は失敗してしまうから。
- エ 夢など結局はただの夢に過ぎず、夢を実現できるのはほんのひとにぎりの人にすぎないから。

問三

空欄

B

にあてはまる最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 職業の肩書で人間を評価する考え方を全員が受け容れる必要は無いぞ
- イ 憧れていた職業につけなかったからと言ってがっかりする必要は無いぞ
- ウ やりたい仕事が見つからないから自分はダメな人間だと思ふ必要は無いぞ
- エ 肩書がつかないからといって立派な人とみなされないと悲観する必要は無いぞ

問四 ―線部C「職業信仰は、ある意味で、偏差値信仰や学歴信仰よりタチが悪い」とあるが、それぞれの信仰のもととなる「職業」と「偏差値」「学歴」との違いを筆者はどのように考えているか、簡単に説明しなさい。

問五 ―線部D「気のおけない」の意味として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 決して油断することできない
- イ それほど仲がいいわけではない
- ウ それほど仲が悪いわけではない
- エ 親しくて気づかいしなくてよい

問六 空欄 E に当てはまる最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 期待感と高揚感 こうようかん
- イ 失望感と無力感
- ウ 責任感と達成感
- エ 不安感と恐怖感

問七 ―線部F「なるべくバカな夢を見ておくことをおすすめする」と主張する筆者の真意をわかりやすく説明しなさい。

問八 ……線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

